

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制	情報処理教育センター運営会議
(責任者名)	船場ひさお
(役職名)	情報処理教育センター長
② 自己点検・評価体制における意見等	
自己点検・評価の視点	
自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムの履修・修得状況は、出席管理システムによる出欠状況および学習管理システム(Moodle)のアクセスログや課題提出状況により把握している。これらの情報は教務課職員やゼミ担当教員も参照可能で、欠席者の早期把握や学習支援につなげている。令和7年度(2025年度)春学期の単位修得率は、経済経営学部87.7%、スポーツ科学部91.3%であった。履修率は、クラス指定の必修科目であるため休学者を除く2年生全員が履修している。学期末には、担当教員が成績評価状況や出席状況をまとめた「実施報告書」を作成し、教授会で全学部に共有している。また、約2か月に1回の頻度で担当教員によるFDを実施し、授業運営の状況報告や課題共有を行い、授業改善に活かしている。
学修成果	成績評価は、実習やワークの取り組み状況、プレゼンテーション、用語理解を測る期末試験などを総合的に判断し、絶対評価で行っている。令和7年度(2025年度)春学期の成績評価分布は、経済経営学部がA34.6%、B32.4%、C13.5%、D7.0%、F12.2%、スポーツ科学部がA25.8%、B30.1%、C19.3%、D16.1%、F8.6%であり、両学部とも半数を超える学生がAまたはBの良好な成績であった。課題提出や理解度が十分でない学生には、情報処理教育センター窓口で個別支援を行い、学修到達度の向上を図っている。成績評価分布や履修者の状況は、情報処理教育センターFD、数理・データサイエンス・AI教育運営会議を通じて関係教職員と共有し、授業内容や評価方法の改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容的理解度	本学では、全学的に学期末の授業アンケートを実施しており、本プログラムでは「Q7: 担当教員の説明の分かりやすさ」「Q12: 知識や技術が身についてきていると感じるか」「Q14: 授業に対する満足度」などの設問を通じて学生の理解度を把握している。令和7年度(2025年度)春学期の結果では、授業進度は適切で、教員の説明は概ねわかりやすく、配付資料も授業理解に役立っているとの回答が多く見られた。一方で、知識や技術の習得実感については個人差がみられる。授業アンケートの結果は担当教員によるFDで共有し、シラバスや教材の改善に活用している。加えて、各回で確認問題やリアクションペーパーを実施し、学生の理解度や反応を把握しながら授業運営を行っている。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業アンケートでは、後輩等他の学生への推薦度に関する質問は設けていないが、「Q7: 担当教員の説明の分かりやすさ」「Q14: 授業に対する満足度」の結果はいずれも全学平均を上回っており、本プログラムの授業に対する学生の評価は総じて高い。これらの結果から、後輩学生への推薦度も高いものと推察される。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和6年度(2024年度)の全学的なカリキュラム改訂において、本プログラムの「データリテラシー演習」を全学部共通の2年次必修科目として新設した。これにより、令和7年度(2025年度)からは計画どおり全学部で同科目を開講しており、休学者を除く全学生が履修している。開講にあたっては、他科目との重複を避けるために曜日・時限を調整し、一部学部では履修クラスを選択できる体制としたことで、学生の時間割や履修計画に配慮しつつ、学修機会の均等化を実現している。今後も履修状況や授業運営の実績を情報処理教育センター運営会議やFDを通じて検証し、授業規模やクラス編成の最適化を図っていく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラム科目を履修している学生は在籍中のため社会での活躍状況及び企業等の評価を得られていないが、今後、本プログラム科目を履修した卒業生の状況について企業等に対してアンケート等を通じて評価をいただき、改善・進化に資する予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラム科目は専任教員5名が担当し、企業等での勤務経験も含め様々な経験のある教員により、社会や産業界での求められる知識、能力等を把握し、実社会で役立つ内容の講義を展開している。今後も産業界が求める人材像について意見を求め、プログラムに反映する予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業の導入では、Society5.0時代に求められる力や社会の姿を提示し、数理・データサイエンス・AIの基礎的素養は文理を問わず必要となる力であることを説明している。そのうえで、学部の専門分野や将来の進路と関連付けながら、AI活用事例の調査やディープフェイク、フィルターバブルなど身近な話題を題材に、数理・データサイエンス・AIを自分ごととして捉えられるよう工夫している。AIへの関心の高さを踏まえ、生成AIを実際に操作する体験的実習の時間を設けるとともに、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションを積極的に取り入れた参加型授業を展開している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	数学やデータ分析に苦手意識を持つ学生にも理解しやすい授業を重視している。AIの仕組みやデータ分析の解説では、数式の使用を控え、図解や実例を多用して概念的に理解できるよう工夫している。全学部の1年次必修科目でPCとOfficeソフトの基本操作を学ぶが、操作に不安を持つ学生も多いため、既習内容も丁寧に扱っている。各授業には学生アシスタント(Student Assistant)を配置し、PC操作やワークをきめ細かく支援して理解を補っている。教材や講義スライドはMoodle上で公開し、欠席者を含めた全学生がいつでも確認できる環境を整備している。さらに、AIやデータ技術の進歩や社会的トレンドの変化に対応し、担当教員間で情報共有を行い、教材や実習内容を隨時アップデートしている。